

ふるさとの歴史

―遺跡と文化財からみた府中―

ふるさとの歴史 ―遺跡と文化財からみた府中―

令和6年(2024)3月29日 発行

編集・発行 府中市教育委員会 〒726-0003 広島県府中市元町1-5
印刷 有限会社コトブキ印刷 〒726-0013 広島県府中市高木町840-2



私たちが暮らすまちの姿は、先人たちの暮らしの積み重ねの上に成り立っています。

府中市教育委員会では、このような先人の足跡を通して、市民の皆様が、府中の歴史を知り、ふるさと府中に目を向けるきっかけとなることを願い、平成 26 年に、府中市が市制施行 60 周年を迎えたことを記念して、本書を作成しました。

平成 31 年改訂後も、発掘調査などで明らかになった新しい情報を本書に反映するためにこの度、新たに改訂を行います。

本書を通じて、先人たちの営みやまちの移り変わりを振り返り、府中の歴史に思いを馳せる一助となることを期待するとともに、皆様がいづまでもふるさと府中を愛し、語り続けていけるようになることを切に願っています。

令和5年3月

府中市教育委員会 教育長
荻野 雅裕

府中市の歴史

① 日本のあけぼの 02

府中市の縄文遺跡

② 弥生から古墳時代 03

米作りのはじまり

伊豆迫山遺跡

古墳出現

山の神古墳群

南山古墳

③ 国府の時代 06

古墳の終焉と備後国の誕生

律令制度の確立

備後国府跡とその調査

前原遺跡と古代山陽道

常城

青目寺跡

国府の衰退

武士の時代へ

④ 中世から近世まで 17

南北朝時代の動乱

有福城と青目寺

八尾山城と守護山名氏

上下の臨済宗寺院

中世の石造物

上下代官所

石州街道

上下銀と上下の町並み

⑤ 近代のあゆみ 24

上下の町並み

旧芦品郡役所庁舎

福塩線の開通

工業都市府中の萌芽

関連年表 31

府中市の指定文化財 32

府中市の遺跡一覧・地図 42

関係地図 49

資料館案内 50

表紙の写真

「上下白壁の町並み」「恋しき」

「金毘羅神社石燈籠」

「備後国府マスコットキャラクター 国府まろ君と国府ひめちゃん」

*この本は、文化庁「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」により作成しました。

府中市の歴史

① 日本のあけぼの

日本に私たちの祖先が住みはじめたのは、約 35,000 年前頃だと考えられています。その頃の気候は寒冷で、陸も海も氷で閉ざされ日本列島と大陸は陸続きでした。祖先は、大陸からナウマンゾウやオオツノジカなどの大型哺乳動物を追いつながら移り住んできたようです。彼らは、岩陰や洞窟を住居に利用したり、台地の上や斜面に小屋を建て、移動しながら木の実などを拾い、大型動物を狩って暮らしていました。石を打ち割って作る鋭い刃の「打製石器」を槍やナイフとして狩りに利用していたようです。この時代を「旧石器時代」と呼びます。

約 15,000 年前頃から暖かくなりはじめ、海水面が上昇していきます。約 10,000 年前頃には現在とよく似た温暖な気候になり、日本列島は大陸と切り離され、今の姿に近い形になりました。豊かな森や海ができ、シカやイノシシ、その他の小動物、魚介類も増えました。環境の変化にあわせて、移動しながら暮らしていた人々が徐々に一か所に長く留まって「定住」生活ができるようになりました。食べ物がとれやすい場所に家を建てて集落をつくり、山や海でとれる食べものを季節ごとに計画的にとって生活していたようです。家は、地面に穴を掘って柱を立て、草や土で屋根を葺いた竪穴住居でした。人々の生活で最も大きな変化は土器の発明です。土器は粘土をこねて焼いた器で、貯蔵や煮炊きに使いました。煮ることで食べ物のもつ栄養を十分に引き出せるようになり、食生活が格段に豊かになりました。この時代の土器は、表面に縄を用いた文様が付けられたものが多いことから「縄文土器」といいます。土器が使われはじめた頃からの約 12,000 年間を縄文時代と呼びます。縄文時代の人々は、環境にあわせて柔軟に生活を変化させ、彼らの発明は現在の私たちの暮らしの基礎になっています。

ー府中市で確認されている最も古い「人の営み」の痕跡は、行年遺跡（上下町階見）で見つかっています。縄文ではなく押型文という文様のついた土器です。縄文時代早期（約 9,000～7,000 年前頃）に作られたと考えられています。

府中市の縄文遺跡

上下町矢多田の扇原遺跡でも、縄文時代前期から後期（約 7,000 ～ 3,000 年前）にかけての縄文土器が出土しています。また、広島県北東部の石灰岩地帯には、帝釈川の溪谷を中心とした約 20 km四方の範囲に、50 か所以上の岩陰・洞窟遺跡が存在し、帝釈峡遺跡群として全国的に知られています。上下屏風洞洞窟遺跡（上下町小堀）もその一つで、縄文時代前期（約 7,000 ～ 6,500 年前頃）と後期（約 4,500 ～ 3,500 年前頃）の土器が出土し、当時の人々が自然にある洞窟を住まいとして生活していたことがわかりました。

府中市街地においても、近年の発掘調査によって縄文土器出土地が増えており、府中町から鵜飼町にかけて 11 地点で確認されています。

池下遺跡（府中町）は南向きのゆるい斜面に立地しており、縄文時代後期中頃から晩期はじめ頃（約 4,000 ～ 3,000 年前）の縄文土器がまわって出土しました。住居跡や貯蔵穴などの生活の痕跡は確認できませんでしたが、出土した縄文土器の時期から、少なくとも 1,000 年もの間、この土地に人々が生活していたと考えられます。



石器の材料(サヌカイト)と石器(スクレイパー)
ホリノ河内遺跡(元町)・セツ池(本山)



上下屏風洞洞窟遺跡(上下町小堀)
〔洞窟入口は幅1.6m高さ1.1m〕



縄文土器：池下遺跡（府中町）

世紀	時代
B.C.	旧石器
A.D.	縄文
1	弥生
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	安土桃山
18	江戸
19	
20	明治
21	大正
	昭和
	平成
	令和

指定文化財一覧

遺跡一覧

② 弥生から古墳時代

米作りののはじまり

縄文時代の終わり頃になると、米作りが大陸から伝わり、鉄や青銅などの金属も日本列島へ入ってきました。米作りは九州から東北まで伝わり、人々の生活は、狩猟・採集中心のものから農耕へと変化しました。当初は低湿地を利用して米を栽培していましたが、後には用水を引き、水田を拡大し、生産力を上げていきました。

「石包丁」で刈り取った稲は「高床倉庫」に貯蔵され、「弥生土器」という素焼きの器で煮炊きをし、鉄からは農工具などの実用品をつくり、青銅は「銅鐸」など祭りの道具に利用されました。この時代を「弥生時代」と呼んでいます。

米作りを始めてから人々の生活は安定し、人口が増加することで「ムラ」ができました。やがて、ムラのなかには貧富の差や身分の違いが生まれ、ムラ同士が争いながら「クニ」という大きな集まりになったと考えられています。そして、クニをまとめる力をもったものが王となりました。そのころの日本列島には百以上のクニがあり、そのなかで多くのクニを従えて強大な力をもった「邪馬台国」では、「卑弥呼」という女王が占いなどの呪術によって人々を治めていました。卑弥呼は中国（魏）まで使いを送り、「親魏倭王」の印や鏡をもらったと中国の歴史書「魏志」の倭人伝に書かれています。

一府中市では、弥生時代中期から後期にかけての集落や、弥生時代後期から古墳時代始め頃の集団墓が、市街地を望む丘陵上で多数確認されています。

伊豆迫山遺跡 — 弥生から古墳の住居と墓 —

伊豆迫山遺跡（広谷町）は、市街地の東側丘陵に立地する遺跡です。平成8年（1996）と平成12年（2000）の発掘調査で、弥生時代中・後期と古墳時代中期の集落、弥生時代後期から古墳時代の初め頃までの集団墓などが見つかっています。

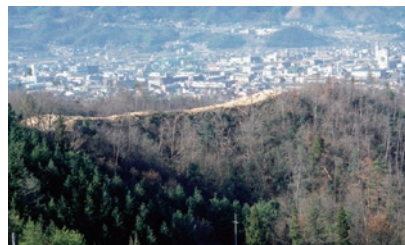
弥生時代の集落は、南向きの斜面に営まれ、竪穴住居跡が数棟見つかっています。今から約1,900年前頃のもので、住居の周辺からは、当時使用していた土器のほか、「分銅形土製品」が多数出土しました。分銅形土製品は、瀬戸内海地域を中心に見られるもので、ムラのまつりの時の道具やお守りとして使用されていたと考えられています。

集団墓は、集落よりさらに上部の尾根上に造られていました。墓の数は約100基で、今から約1,800～1,700年前頃と考えられます。それらのなかには、ガラス玉や勾玉・管玉が副葬されたものや、人骨の一部が残るお墓もありました。

市街地周辺では、他にも、門田A遺跡・山の神遺跡（桜が丘）など、市街地を望む丘陵一帯でこのような墓地が見つかっています。展望のよい場所に墓地がつくられていたようです。



石包丁
ホリノ河内遺跡（元町）出土



伊豆迫山遺跡（広谷町）遠景



伊豆迫山遺跡（広谷町）の竪穴住居跡



墓穴跡



分銅形土製品

古墳の出現

弥生時代の終わり頃から、各地では大きな土盛り（墳丘）墓がつくられるようになり、その地方の王の墓と考えられています。墓はその後巨大化し、「竪穴式石室」に遺体を葬るとともに多量の銅鏡、鉄製の武器や農工具などが副葬されています。この墓を「古墳」といい、つくられた時代を「古墳時代」と呼んでいます。古墳のうち、「前方後円墳」は、ヤマト（現在の奈良盆地周辺）の王が中心となって、日本各地の有力なクニが政治的に結びついて出現したものと考えられています。この広域の連合を「ヤマト政権」といい、ヤマトの王は「大王」と呼ばれ、その力は東北から南九州まで及びました。大王のなかには、中国に使いを送り「將軍」の称号をうけるものもいました。古墳時代後期（約1,500年前頃）になると、日本各地で小さな古墳の密集した「群集墳」が出現します。これらの古墳では、「横穴式石室」に追葬が行われており、家族を同じ墓に続けて埋葬していると考えられています。

一府中市では、周辺を広範囲にわたって統括していたような大規模な古墳は確認されていませんが、中小多数の古墳が各地に築かれており、当時の府中の様子を伝えています。

山の神古墳群 — 古墳に葬られた家族 —

古墳時代の前半期（約1,700～1,600年前頃）、備後地方南部では「箱式石棺」と呼ばれる墓が盛んにつくられています。石棺という形式と花崗岩の地山に掘り込んだつくり方のため、人骨が残りやすいのが特徴です。出土した人骨を分析することで、当時の社会状況などさまざまなこと、特に家族のあり方がわかってきています。

山の神第1号古墳（元町）では、3つの箱式石棺が見つかり、第1主体には男性人骨1体、第2主体には男女の成人人骨各1体、第3主体には幼児の歯が残っていました。人骨の形質から、第1主体の男性と第2主体の男性は血縁関係にあることがわかりました。その後調査された山の神第2～4号古墳で出土した歯の形質から、被葬者の間には血縁関係が推定されています。山の神古墳群は、ムラの首長（地域のリーダー）とその家族が葬られた墓であることが明らかになりました。

箱式石棺の中に複数の遺体が葬られている例は数多くあり、府中市内でも山の神第1号古墳のほか、同第2号古墳、用土町の城山第1号古墳などがあります。埋葬の仕方をみると、遺体の並べ方には、頭を同じ方向に向けたものと頭と足を逆さまに向けたものがあります。性別をみると、男性と女性を合葬するケースが多く、従来は夫婦と考えられていましたが、最近の研究から兄妹や姉弟など血縁関係にあることがわかってきました。複数の遺体を葬る場合は、前の遺体を整理して次の遺体を葬っており、追葬が行なわれていることもわかりました。山の神第1号古墳では、先に葬られた人骨の頭部が赤く塗られていますが、これは遺体が白骨化した段階で顔料が塗られたことを示しています。このように埋葬された状況から、当時の風習や人々の死者に対する感覚がうかがえます。



千原古墳（土生町）箱式石棺



山の神第1号古墳
（石棺内に合葬された人骨）

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D.	弥生
1	
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	安土・桃山
18	江戸
19	
20	明治
	大正
	昭和
21	平成
	令和

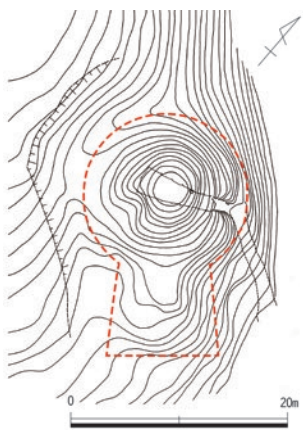
指定文化財一覧

遺跡一覧

南山古墳 — 地方の前方後円墳 —

南山（第1号）古墳は、上下町水永と斗升町との境の峠近くにあります。広島県史跡に指定されている横穴式石室をもつ前方後円墳で、平成3年（1991）に石室内の発掘調査と墳丘の測量調査が行われました。その成果から、墳丘は、全長約23m、後円部の直径約14.5m、前方部の長さ約8.4m、後円部墳頂と前方部墳頂の標高差2.5～3mで、墳丘の形態について、前方部が短小で後円部との標高差が大きなタイプであることがわかりました。石室規模は、長さ8.4m、奥壁の幅約2.5m、奥壁の高さ約2.2mで、石室内には、立柱状の石が突出して玄室と羨道を区別しています。遺物は7世紀前半の須恵器が出土していますが、石室の石材利用状況や庄原市唐櫃古墳に類似していることなどから、古墳は6世紀の終わり頃、約1,500年前に造られたと考えられます。

その頃は、備後地域は大きく南部と北部の2地域に分かれていたようです。南山古墳に見られる立柱状の石が突出する形態の古墳は、北部地域を中心に分布していることから、南山古墳は北部地域に属し、その南端に位置していたと考えられます。



南山古墳墳丘測量図【等高線は25cm間隔】
--- 墳丘推定復元ライン



南山古墳 墳丘



南山古墳の石室内部

こぼれ話

お墓の移り変わり

弥生時代には、村人のほとんどは集団墓地に葬られていましたが、やがて首長やその家族などの限られた人が、特別に区画・土盛りされた墓に葬られるようになりました。

古墳時代には、首長など限られた人のみが大型の古墳を築造しますが、古墳時代も終わり頃になると、小規模な古墳が全国的に増えていきます。これらの古墳にはムラの有力者が葬られており、古墳を造れる階層が広がっていることを示しています。

奈良時代以降には、墓の発見例が減っていきますが、身分関係を厳格に維持する律令国家の成立によって、葬られる人の階層が再び限られるようになったと考えられます。また、発見される墓も家族の墓ではなく、個人の墓が中心で火葬が行われている例もあります。

中世は、一部の人の墓しか残っていませんが、江戸時代の後半になると、墓石を持った墓が造られはじめます。

そして、現在のようにみんなが墓に葬られる時代へとつながっていきます。



3 国府の時代

古墳の終焉と備後国の誕生

7世紀になると権威の象徴であった前方後円墳が造られなくなり、それに代るように仏教寺院が建てられるようになります。この頃、中国や朝鮮半島の制度を手本にして、天皇を中心とする体制づくりが進められました。奈良県の飛鳥地方が政治の中心になったことから、この時代を飛鳥時代と呼んでいます。

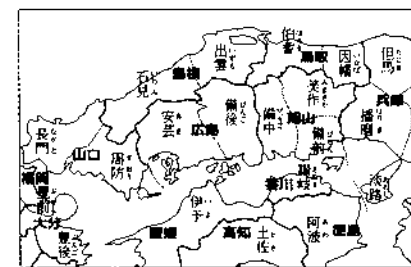
『日本書紀』天武天皇2年（673）の条に、「備後の国司が亀石郡（現在の神石郡）で捕獲された白い雉を都に献上した」という記述があります。「備後」の国が、記録に現れる最初の事例です。

府中市を含む広島県東部地域から岡山県にかけては、古来「吉備」と呼ばれていましたが、8世紀には備前・備中・備後・美作の4つの国（現在の県に相当）に再編成されるとともに、地方の行政制度が整えられました。国と国の線引きがどういう原理で行われたかよくわかりませんが、政治的な領域、文化的な結びつきや地理的なまとまりなどが考えられます。

古墳時代の府中周辺では、広範囲を統括するような「首長墓」（地域のリーダーの墓）は見当たりません。しかし、7世紀後半を過ぎると、畿内地方などに多く見られる1つの墳丘に2つの石室を持つ打堀山B第2号古墳（鶴飼町）や、畿内地方以外ではほとんど出土例がない「鍔座金具」（棺に取り付ける環状の金具）を出土した東槇木山A第4号古墳（鶴飼町）など、特徴的な古墳が出現します。さらに、飛鳥地方の寺院「川原寺」や宮都「藤原宮」で葺かれた瓦に類似する軒瓦を出土する伝吉田寺（元町）が建立され、亀ヶ岳周辺には古代山城である常城も築かれたとされます。国府が設置される前段階に、府中地域に急激な変化が認められます。

時代は少し下りますが、平城京跡から出土した奈良時代初期の「木簡」の中に、「備後国葦田郡葦田里／氷高親王宮春税五斗」と記された荷札があります。これは、葦田里（現在の府中市街地辺り）が氷高親王（後の元正天皇）の封戸（役人や貴族などへの支給地）であったことを示しています。皇族とのこのような関係も、府中における急激な変化に関わっていると考えられます。

こうした背景と、備後の南北の文化の接点、交通路の結節点であったことが関係して、備後国の国府が府中に設置されたのではないのでしょうか。



旧国名図



打堀山B第2号古墳（鶴飼町）



川原寺式軒丸瓦・藤原宮式軒丸瓦
伝吉田寺跡周辺（元町）から出土した瓦

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D. 1	弥生
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	鎌倉
13	
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	安土・桃山
18	江戸
19	
20	明治
	大正
	昭和
21	平成・令和

指定文化財一覧

遺跡一覧

律令制度の確立

和銅3年(710)、奈良の平城京に都が移され、奈良時代がはじまります。当時の日本は、中国の唐に倣った「律令」制度(律：刑法、令：行政組織や税などの規定)により国の仕組みが整い、地方は60余りの「国」、その下に「郡」、さらに下には「里」(のちに「郷」という行政区が設けられました。朝廷の権威を背景に、都と各地域の間に命令や情報を伝えたり、各地からの税を集めたり、徴税のための戸籍づくりをする役所が設置され、全国の隅々まで支配するための体制が整えられました。

国府とは、国という行政区を治めるための役所が置かれた地のことで、国府には「国衙」と呼ばれる役所の建物群が形成されて、そのなかで最も中核的な施設を「政庁」(国庁)といいます。政庁は、門をもった築地塀や堀などの区画施設で周りを囲まれ、内側には正殿・脇殿・前殿・後殿などの掘立柱建物や瓦葺礎石建物が中庭(集会・儀式を行う重要な空間)を中心に規則的に配置されていました。そして、政庁の周辺にはさまざまな事務を行う庁舎、国府で必要なものをつくるための工房、物資を保管する倉庫、国府で働く役人が住む官舎、食材・食事を用意する調理場(厨)などの施設が立ち並んでいました。

国府には、都から「国司」と呼ばれる役人が派遣されました。国の長官である「守」、長官の補佐をする「介」、記録や文書の審査・作成に携わる「掾」・「目」(これらを「四等官」といいます。)と、彼らを支える「史生」です。各国の面積や人口などの基準に応じて、派遣される国司の位階や人数が規定されていました。上国であった備後国の長官である守には、従五位下の位をもつ貴族がひとり任命されました。国司の仕事は、行政・司法・警察・軍事など広範囲にわたり、国司の下で約600人の職員が働いていました。また、国内の農民には、稲や農作物・特産品など物で納める税以外に、物資の運搬や兵役や土木工事・その他の雑務といった労働による税の負担が定められており、国府で労働に従事したり、都で天皇の警備をしたりする人々もいました。

一、国府の所在した府中は、奈良時代から平安時代の約500年もの間、地域の政治・経済・文化の中心となり、情報・物資が交流して多くの人々が関わりをもつ場所であったのです。



「厨」墨書土器 ツジ地区(元町)



復元した国府時代の衣裳



古代「備後国」の行政区分と交通網

備後国府跡とその調査

平安時代中頃に編集された『倭名類聚抄』には、「備後国のなかには14の郡、62の郷、3つの駅家が置かれ、国府は芦田郡に置かれていた」と記録されています。「備後国府」は「備後国」を治める役所が置かれた地ということですが、政庁など国府の中核施設の正確な位置については記されていませんでした。

昭和57年(1982)から、備後国府の場所を明らかにするために発掘調査が開始され、府中市市街地の各地で確認調査が実施されました。その結果、出口町から広谷町までの芦田川北岸の山寄せ一帯に、国府に関連する遺構や遺物が確認されました。この成果を引き継いで、現在まで元町を中心に調査が進められた結果、平成28年(2016)に国の史跡に指定された「ツジ地区」・「金龍寺東地区」をはじめ「砂山地区」「ドウジョウ地区」「伝吉田寺地区(伝吉田寺跡)」など、元町に国府の重要施設(中心部)が所在していたことが明らかになりました。

また、古代山陽道の推定線上に位置していた「鳥居地区」(府川町)では、平成27年(2015)～28年(2016)度の調査で、古代山陽道と山陽道から国府へ向かう道の分岐点が確認され、国府中心部の南側を古代山陽道が東西に貫いていたことが考古学的にも明らかになりました。

ツジ地区

ツジ地区は、元町を南北に流れる砂川(音無川)の東側に広がる、7世紀末(奈良時代の少し前)から13世紀(鎌倉時代初め頃)にかけての遺跡です。

発掘調査の結果、溝に囲まれた約109m四方の区画の内外に、東西南北に主軸を揃えた掘立柱建物跡が多数確認されたほか、礎石建物跡や井戸、区画溝などが確認され、役所に関わるような遺物が多く出土しました。都から赴任してきた国司の館跡、もしくは、文書を扱うような役所の施設があったと考えられています。

出土遺物としては、須恵器・土師器を中心とした大量の日用雑器のほかに、特殊で特徴的な遺物が多く出土しています。「奈良三彩」の蓋付小壺は、奈良時代にわずかに作られた三色(緑・黄・白)の陶器です。この小壺の中には、ガラス製の小玉が54個納められており、建物などを建築する前に行う地鎮の儀式に伴い埋められたものだと考えられています。他にも、「厨」(食事の用意や調理をする場所)という文字が墨で書かれている「墨書土器」や円面硯・風字硯・転用硯などの陶製の硯、役人が着用したベルトに付けられていた飾りである「腰帯具類」、印面に「賀・友・私・印」の四文字が陽刻された銅印、当時の高級陶器である「緑釉陶器」や中国などから輸入された白磁や青磁などの貿易陶磁器があります。緑釉陶器は、9世紀のはじめから10世紀の終わりにかけて、東海地方や京都府・滋賀県などで焼かれた緑色の上薬がかかった陶器です。貿易陶磁器類は大量に輸入される11～12世紀を中心とした時代のもののほかに10世紀段階の古い時代のものも多く出土しています。



緑釉陶器



貿易陶磁器(白磁・青磁)



腰帯具類



銅印



大型建物跡(ツジ地区0203T)



奈良三彩



陶製の硯

こぼれ話

今から1,300年前、同じ葦田郡だった府中と上下

和銅2年(709)、葦田郡を分割して、甲奴郡が新設されたことが『続日本紀』に記載されています。これは、国府が整備されてきた時期と重なります。

分割前の旧葦田郡は、府中と上下を含み、備後国のほとんどの郡と境を接し、位置的にも備後の中心でした。また、当時の主要な道路の分岐点や交差点が、北部は上下、南部は府中に集約されていました。このような地理的な条件を中央政府が重視して、葦田郡に国府が置かれたのではないかと考えられます。

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D.	弥生
1	
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	
18	江戸
19	
20	明治
	大正
	昭和
21	平成
	令和

指定文化財一覧

遺跡一覧

■ 金龍寺東地区

金龍寺東地区は、古代寺院伝吉田寺跡の東に隣接している奈良時代から平安時代にかけての遺跡です。

平成3年(1991)からの断続的な調査で、庭園の池跡、石積基壇をもつ瓦葺礎石建物、掘立柱建物跡、井戸などが見つっています。礎石建物と庭園の池は平安時代初め頃に造られ、礎石建物は軒が深い格式の高いものでした。国府の重要施設の一つと推定され、施設の性格は断定できていませんが、宗教施設もしくは儀式を行なうような施設であったと考えられています。

遺物は、伝吉田寺跡や備後国府の主要施設に葺かれた軒瓦と同じ瓦や鳥の姿が刻まれた鬼瓦などを含む大量の瓦のほか、金属器を模倣した須恵器、墨書土器、硯、唐三彩、緑釉陶器などが出土しています。



板壁付きの掘立柱建物跡



礎石と石積基壇



鬼瓦〔鳥が刻まれている〕



■ 伝吉田寺地区(伝吉田寺跡)

伝吉田寺地区に広がる伝吉田寺跡は、7世紀後半に創建された寺院ですが、奈良時代には備後国府の主要施設に葺かれた瓦と同じ文様の瓦を使用するなど国府に関係が深く、立地的にも国府に隣接していることから、国府設置後には国府の仏教行事の一端を担った寺院と捉えられています。

これまでの調査で、塔と講堂の基壇が確認され、法起寺式の伽藍配置が推定されています。



藤原宮式軒瓦



重圏文系鬼瓦



古代山陽道と国府の分岐点（はじまりの広場）からみた備後国府想像図（画：早川和子）

■ ドウジョウ地区

ドウジョウ地区は、元町を南北に流れる砂川（音無川）と金龍寺東地区の間に広がる奈良時代から平安時代にかけての遺跡です。

これまでの調査で、国府関連施設を取り囲むように区画していたと考えられる奈良時代の溝が見つかり、南北約80mにおよぶ区画施設があったと考えられています。区画の北辺では、並行する幅約2.5mの2つの溝が確認され、土塁があったと考えられています。溝からは、「京」「所」などの墨書土器が出土しています。



ドウジョウ地区(元町)区画溝

■ 砂山地区

砂山地区は、音無川の西岸に広がる遺跡です。

昭和63年(1988)、元町地区の砂川（音無川）の西側で、都市計画街路の整備に伴い発掘調査が行われ、倉庫と考えられる平安時代の掘立柱建物跡や井戸跡などが見つかりました。柱の根元部分や井戸枠などの木材が、腐らずに当時の状態を保ったまま出土しました。また、井戸を埋めた土の中には完全な形の土器が多く納められていました。井戸を廃棄する際に行われた儀式に関わるものと考えられます。

また、平成28年(2016)に府川町の鳥居地区で確認された、古代山陽道から国府中心部へ向かう道の真北に位置しており、下水道工事の際に出土した備後国府系の軒瓦などから、瓦葺の重要施設があったことが想定され、国府の中心施設「国庁」推定地のひとつとなっています。



備後国府系軒瓦

■ 鳥居地区

府中市文化センター周辺に広がる遺跡です。

発掘調査で、古代山陽道と備後国府の中心部に向かう道の分岐点を確認され、国府の入口とも言える重要な場所であったことがわかりました。現在は、調査で確認された道路を表示した「はじまりの広場」として遺跡を生かした広場に整備されています。

また、文化センターの建設工事中には、病気などの災いを祓う儀式(祓)で使われたとみられる「人形」(祭祀具)や「権介」(国司の役職名)と書かれた土器なども出土しています。



はじまりの広場から見た備後国府想像図（画：早川和子）

人形
鳥居地区(府川町)出土国府の
中心部へ

古代山陽道

鳥居地区で確認された分岐点

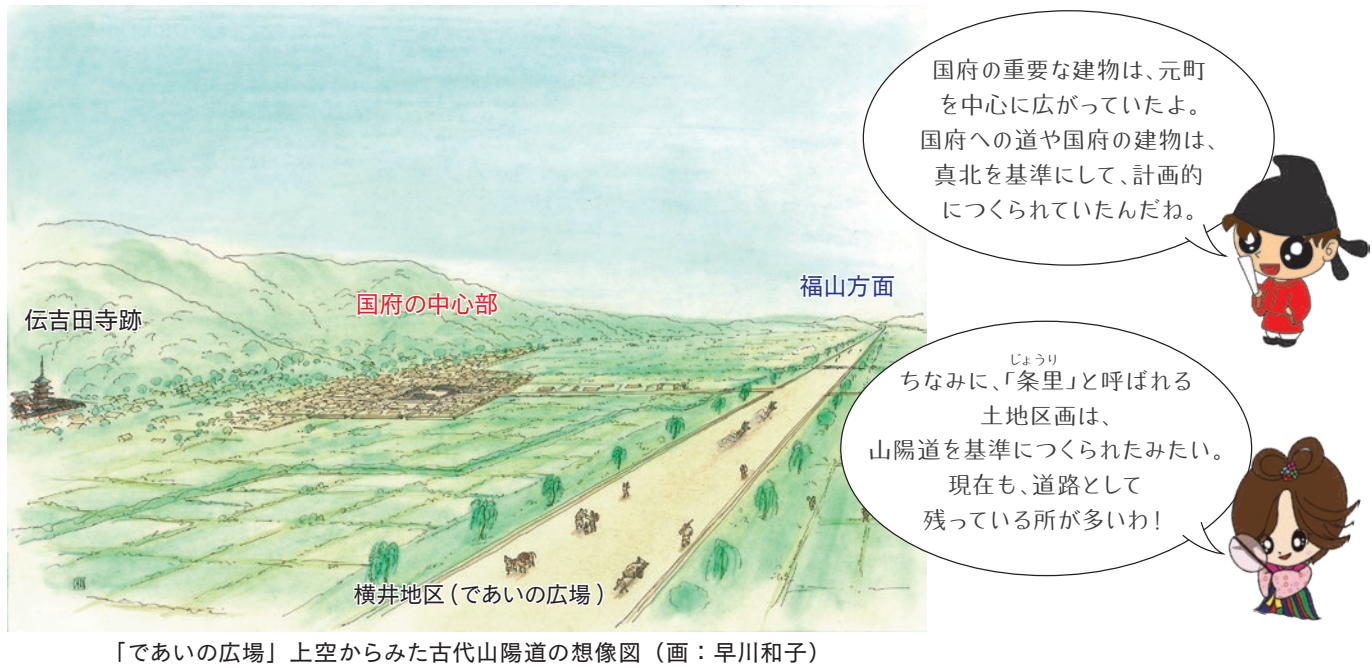
■ 備後国府と古代山陽道

古代山陽道は、奈良・平安時代に都と九州（大宰府）を結び、多くの人が行き来した重要な道路です。

府中市周辺では、現在の福山市神辺町、駅家町から府中市、尾道市御調町を東西に貫いていたことが推定されていましたが、発掘調査で確認された場所はありませんでした。

しかしながら、平成 27 年 (2015) から平成 29 年 (2017) 度実施された調査で、前述の鳥居地区のほか、生涯学習センターの南に広がる横井地区、道の駅びんご府中の北側の八反田地区にて、古代山陽道の痕跡が確認され、府中市街地においては、国府の南側を、幅約 10m の山陽道が、東西方向に直線的に延びていたことが明確になりました。

古代山陽道の両側の側溝が確認された横井地区では、鳥居地区（はじまりの広場）と同じように、発掘調査で見つかった古代山陽道について、道路部分は真砂土、側溝部分は石張りで表示し、道路の位置や幅が体感できるように整備されています（であいの広場）。



■ 市街地に広がる遺跡

この他にも、市街地には国府の時代の遺跡が数多く存在しています。

備後国府跡の発掘調査では、国府附属工房の系譜を受け継いだ鋳物に関係した遺構・遺物が多く確認されます。また、中世には府中に「国分寺助国」という刀鍛冶の一党がいたと伝わっており、近代金属工業の素地になった可能性があります。

府中市に国府が置かれたことは、その後の府中にも大きな影響を与えました。現在も、寺社や道路（地割り）、伝説として、国府に由来するものが多く残されています。

備後国府は府中の原点ともいえるべき遺跡で、今後の調査の進展によって、国府の中心施設（国庁）など、当時の状況がより明らかになっていくでしょう。解明が待たれています。

■ 前原遺跡と古代山陽道

前原遺跡（父石町）は、昭和 10 年 (1935) の福塩線建設に伴う工事で、奈良時代の瓦が大量に出土したことにより発見されました。当初は寺院跡と考えられ、「父石廃寺」や「前原廃寺」などと呼ばれていましたが、現在では「葦田駅（あしたのうまや）」と考える説が有力になっています。駅家（うまや）説は、「マエハラ」という地名が「ウマヤ」→「マヤ」→「マエ」とつながることや、大量に出土している瓦を他地域の瓦文様と比較研究した結果から推定されているものです。

駅家とは、古代の官道に沿って一定の距離ごとに置かれていた施設で、乗継ぎ用の馬が常置されており、現在的高速道路のサービスエリアにあたります。都と大宰府を結ぶ古代山陽道は最も重要な路線とされ、外国からの使節が通ることもありました。山陽道では、外国使節の宿泊所も兼ねていて迎賓館的な性格もあったため、瓦葺・白壁・朱塗りの柱であったと伝えられています。布勢駅（ふせのうまや）に推定されている兵庫県たつの市の小犬丸遺跡では、大量の瓦のほかに、表面に白い土が付着した壁土や赤色顔料の付着した瓦が出土しています。

■ 備後の駅家

古代山陽道の経路や駅家推定地についてはさまざまな説があります。そのなかで推定地がほぼ一致しているのは、品治駅（ほんじのうまや）と推定されている福山市駅家町の最明寺跡（中島遺跡）です。現地では以前から瓦が大量に採集され、地表観察で基壇状の盛り上がりも確認できます。遺跡の南に隣接する最明寺跡南遺跡では、県道建設に先立って発掘調査が行われ、駅家の特徴付ける備後国府系瓦と呼ばれる文様の軒瓦が大量に出土しました。前原遺跡で大量に出土する瓦も国府系の瓦であるため、駅家跡と推定されています。

■ 発掘調査の成果

前原遺跡は、平成 6 年 (1994) から平成 18 年 (2006) まで断続的に発掘調査が行われました。

調査の結果、奈良時代の礎石建物、掘立柱建物から礎石建物に改築された建物跡、瓦葺の築地塀跡、遺跡をとりかこむ溝、山陽道側溝の可能性がある直線的な溝、建物跡に先行する奈良時代前半の溝などが確認され、全体は 93～94m×75～76m の大規模な施設であることが明らかになりました。赤色顔料の付着した瓦を含む大量の瓦（軒平瓦、軒丸瓦、面戸瓦、鬼瓦）、「土馬」をはじめとする呪い用のミニチュア土製品、煮炊きに使う土器なども出土しました。また、遺跡内には古墳も確認されましたが、墳丘のほとんどは破壊され横穴式石室の一部が残されていました。

掘立柱建物は、柱穴が一辺 1.2m 以上の大きさの隅丸方形で、広島県内でも最大級です。建物規模は、東西方向では柱が 5 本で、それぞれの間隔が 2.4m ずつの全長 9.6m、南北方向では柱が 7 本以上で、それぞれの間隔が 3.6m ずつの全長 21.6m 以上になります。この大きさは県内



前原遺跡出土瓦
〔備後国府系と言われる軒瓦〕



前原遺跡遠景（朱線は遺跡範囲）



前原遺跡の「巨大建物」跡



土馬（病気や災害を防ぐまじないに使用）

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D.	弥生
1	
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	安土桃山
18	江戸
19	
20	明治
21	大正
	昭和
	平成
	令和
指定文化財一覧	
遺跡一覧	

でもほとんど調査例がないほどの規模で、「巨大建物」といってもいいでしょう。また、建物は総柱^{そうぼしら}という構造をとっており、「くら」(蔵、倉、庫)や居宅など床張りのものと考えられます。さらに、東西と南北方向の柱の間隔が極端に違うことも特徴です。

このような特徴をもつ大規模な建物は、野磨^{やま}駅と推定される兵庫県上郡町の落地飯坂遺跡^{かみこおり おろ ち いいざか}や近江国府政庁(国府の中心施設)の東400mにある大津市の惣山遺跡^{そうやま}などでも確認されており、官衙^{かんが}(役所)関連の特殊な建物であることはほぼ間違いないでしょう。

また、この大規模な建物は、奈良時代中頃に掘立柱から礎石建物へと建て替えられています。この状況は、広島県府中町の下岡田遺跡^{しもおかだ あき}(安芸駅)や兵庫県たつの市の小犬丸遺跡^{ふせ}(布勢駅)と同様のあり方を示しており、前原遺跡が駅家であるという仮説を補強するものです。さらに、建物に先行する奈良時代前半の溝が見つかったことで、遺跡の中心部が整備された時期の手がかりが得られました。施設を整備・造成する際に破壊された横穴式石室の埋土から奈良時代の初め頃の土器が出土したことを考え合わせると、奈良時代初めには遺跡周辺が広範囲(現地形から推定すると南北約200m、東西約100m)に造成され、ついで奈良時代の中頃以降に、中心部の築地や建物が整備されたと思われます。

■ 備後国府と前原遺跡

古代山陽道については、備後国府の南側を通っていたことは発掘調査で確認されましたが、その他の場所についての正確なルートはわかっていません。前原遺跡を駅家と考えた場合、遺跡の西側に山陽道が通っていたと推定されますが、平野部が狭い現地形から考えると、駅家・山陽道とも立地条件が厳しいところに設置されていたことになります。国府にとって、西の入口にあたる葦田駅は特に重要な地点であり、駅家や山陽道の設置にあたっては、駅間距離や通行の便だけでなく、国府の存在も背景として大きく影響していたと想定されます。

■ 常城 — 幻の古代山城 —

常城は古代の歴史書『続日本紀』養老3年(719)の条に「備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停む」として名前がでてきます。その地名から福山市新市町常および府中市本山町七ツ池周辺一帯に存在したと推定されています。

昭和42～43年(1967～68)、府中高等学校の豊元国教諭と地歴部とよもとくにが七ツ池周辺を現地踏査し、全国的な調査例がほとんどなかった当時としては、画期的な成果をあげることができました。しかし、各地での調査が進んだ結果、当時確認された遺構の大半は、今では古代山城に関係しないと考えられています。そして、現在も確認調査が行われていますが、明確な遺構は見つかっていません。

古代山城は、朝鮮半島の覇権をめぐって、百済^{くだら}、新羅^{しらぎ}、高句麗^{こうく}、唐^り、日本などの諸国が入り乱れ争っていた7世紀に、瀬戸内・九州などの西日本各地に築かれました。朝鮮半島の山城築造技術を取り入れて築かれているため「朝鮮式山城」と呼ばれています。

今までは、白村江の戦い(天智2年(663))で唐と新羅の連合軍に敗れて以後、對外防衛のために、築かれたと考えられてきましたが、最近では、国府が存在する平野の背後にある山城について、對外防衛のためだけでなく地域支配の拠点という考え方が強くなってきています。常城も単なる軍事施設ではなく、備後国府に先行する地域支配の施設であったと捉えることもできます。



常城推定地の七ツ池周辺

■ 青目寺跡 — 七ツ池周辺の山上寺院 —

府中市街地の北方にある亀ヶ岳山頂近くには、通称「七ツ池」と呼ばれるため池群があり、市民の憩いの場として親しまれ、周辺には、青目寺跡や「常城」推定地など全国的にも貴重な歴史遺産が多く存在しています。青目寺は天台宗の寺院で、延喜年間(901～923)には、山上に4坊、周辺の山腹に11寺を従えるほど隆盛していましたが、たび重なる火災などによって次第に衰退しました。寛保3年(1743)には、現在地に焼失をまぬがれた仏像を移したという言い伝えがあります。青目寺に残る古い仏像の製作年代は、平安時代の初め頃と推定されており、伝承を裏付けています。

青目寺跡は、古代山城の「常城」推定地と重複していますが、各地の古代山城には後世になって山上寺院の造られている例が多く見受けられます。これは単なる偶然ではなく、建物などを造るための平坦地が確保しやすいことや、水が豊富で当時の中心地に近接しているなど、立地の共通性によるものと考えられます。また、山城に使用されていたときの登山道や通路が残され、建物用に造成していた平坦地を活用することができ、他の場所より容易に開山できたことも要因の一つと考えられます。

昭和42～43年(1967～68)にかけて、府中高等学校の豊元国教諭と地歴部が七ツ池の周辺を主に地表観察によって調査し、山上寺院が全国的にほとんど調査されていなかったなかで、画期的な成果をあげることができました。その後、平成7年(1995)以降の継続的な分布・確認調査により、各地点に中御堂・北御堂・西御堂・東御堂・南御堂とよばれる建物遺構が確認されています。平安時代の初め頃の緑釉陶器や、南北朝時代の輸入陶磁器(青磁)が出土したことで、山上の青目寺が平安時代初め頃に開基されて、南北朝時代までは伽藍が維持されていたことが確認でき、山上の寺院と中腹にある現在の青目寺が並存していたことも明らかになりました。

また、現青目寺の石垣改修に伴って事前に調査した結果、奈良時代の瓦が見つかり、青目寺の起源がさらに遡る可能性が高くなりました。さらには、宗教面で国府の機構の一部を担い、それを背景として山上に大伽藍を展開していったことも想定されます。

以下、各地点における発掘調査の成果を紹介します。

■ 中御堂地点

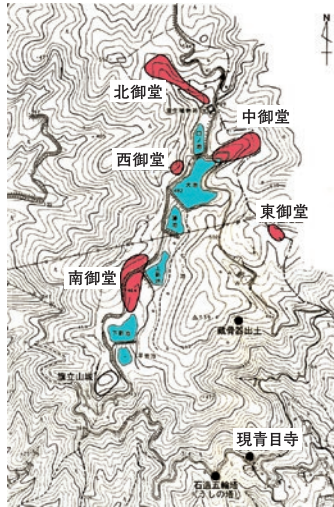
ツツミ池(6番池)傍らの平坦面に礎石^{そせき}が6か所残っており、何らかの建物があつたことがうかがえました。調査の結果、礎石の抜かれた跡も数か所見つかっており、平安時代の土器が出土しました。なお、背後の谷の奥には、非常に大きな平坦地があることが確認されています。

■ 西御堂地点

大池(5番池)西側の山腹に平坦地が1か所あります。調査の結果、石敷きの通路が見つかり、礎石らしい石も残っていました。

■ 東御堂地点

中御堂から、東回りで青目寺に降りる林道を進み、峠になった地点から東の山へ数百m入ると、南側に延びる尾根筋があり、その鞍部を削平して平坦面が作られています。調査の結果、平坦面の中心には、石で周りを囲って一段高くした基壇^{きだん}が残っており、その内側には礎石が並んでいます。方形の御堂が建っていたと見られます。



青目寺跡 御堂配置図



中御堂の建物跡



東御堂の基壇

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D.	弥生
1	
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	鎌倉
13	南北朝
14	室町
15	戦国
16	安土桃山
17	
18	江戸
19	
20	明治 大正 昭和
21	平成 令和

指定文化財一覧

遺跡一覧

■ 北御堂地点

口ノ池（7番池）からせせらぎ水路に沿って奥に入ると、右手の山腹に平坦地が1か所あり、さらに左手の奥にはたくさんの平坦地が広がっています。調査の結果、谷底に近い斜面に堆積した土層には多くの土器片が含まれていました。平安時代前半のものを中心に、緑釉陶器も出土しています。

■ 南御堂地点

上新池（3番池）と下新池（2番池）の間の道路を挟んで、両側の山腹に数か所の平坦地群が確認されています。かつては井戸が残っていたようですが、道路工事で埋まってしまいました。調査の結果、13～14世紀頃に中国の龍泉窯で焼かれた青磁の花瓶（牡丹の花の文様が浮き彫りになっている）や小形の椀が出土しています。

また、石垣の並び方や積み方、地形の特徴などから、通路＝参道と推定される部分が上方の平坦地に向かって延びている状況も認められます。



南御堂 参道石段跡

■ 現在の青目寺（青目寺観音堂遺跡）

山上の「青目寺」が衰退した後、江戸時代に亡失をまぬがれた仏像を移したと伝える寺院の境内です。石垣の改修工事に際し、石垣が江戸時代の珍しい特徴をもっているため、解体後も旧状を復元する工事を行いました。その時の確認調査で、石垣の裏込めから奈良時代と推定される平瓦が出土し、青目寺が奈良時代まで遡る寺院跡である可能性が高まりました。



現青目寺石垣の裏込め

こぼれ話

骨蔵器 — 火葬された人々 —

奈良時代になると、「骨蔵器」と呼ばれる容器に火葬された遺骨を納めて葬る「火葬墓」が現れます。記録によると、日本で初めての火葬は道昭というお坊さんで、文武4年（700）のことです。これは釈迦が荼毘に付されたことに由来し、その後火葬は僧侶にとどまらず、天皇をはじめとする身分の高い人や貴族、官人（役人）などにも見られるようになりました。しかし、当初は一般の人々でなく、限られた人によりのみ採用されていたようです。その後、都周辺だけで行われていた火葬も、次第に日本各地で見られるようになりました。これは、仏教が「鎮護国家の思想」として地方へ広められたことや、「律令制度」により中央の政治体制に、地方が組み込まれたことなどが理由としてあげられます。

広島県内では、現在まで30例余りの火葬墓が確認されていますが、府中市は特に多く見られます。伊勢地岡遺跡（本山町・府中町）、亀ヶ岳遺跡（本山町）、坊迫C遺跡（元町）、角尾山遺跡（広谷町）、ウロウギ遺跡・亀寿山遺跡（中須町）です。火葬墓の発見場所は、ほとんどが丘陵の先端部分で、市街地を臨める好立地と云えます。しかし、いずれの事例も骨蔵器の壺が偶然に発見されているだけで、蓋に使われた土器や埋められていた墓壇（墓穴）や石囲いなどの遺構は確認されていません。

火葬墓が府中市内に多いことについては、「備後国府」の存在を無視できません。国府では、国司だけでなく周辺の人々も仏教を信仰していたと思われ、その影響で多くの官人が火葬されていたことを想像するに難くありません。県内の火葬墓を見ても、役所跡や駅家跡・寺院跡などの近辺で確認されることが多く、律令国家や仏教との密接な関連をうかがわせています。



亀寿山遺跡の骨蔵器

■ 国府の衰退

延暦13年（794）に京都の平安京に都が移され、10世紀に入るところには、朝廷が国ごとの税の徴収や土地の管理などを国司の裁量に委ねるようになり、任国を私物化する国司が現れました。そのなかで、国司の職は利権化し、朝廷や有力貴族に「志」（賄賂）を届けたり、寄付したりして国司に任命（成功）される下級貴族が出てきました。任地で実務をとる国司は「受領」とも呼ばれましたが、任命されても任地に赴かず「目代」を派遣する「遙任」国司も現れ、地方制度は形骸化していきました。国によっては、国司が暴政により郡司や住民に訴えられることもありました。

その後、国衙領（荘園以外の土地）からの税などを特定の寺社や個人（後に世襲化）に与える「知行国」の制度もおこり、土地の私有化が進みました。各地の国府調査例から、この頃の政庁は施設が簡略化していったことがわかります。政庁に代わって、国司や目代の居館が政治の中心になったためと思われます。鎌倉時代になっても朝廷は国司を任命しましたが、武家政権（幕府）の影響力が大きくなるにつれて、次第に名ばかりのものになっていきました。

ー府中市では、伊豆迫山遺跡（広谷町）でこの時代の土壙墓・木棺墓が見つかり、副葬品として、土師器や刀の他、「湖州鏡」（中国の湖州地方で製作された鏡）が出土しています。湖州鏡には、中国からの輸入品のほかに日本や朝鮮で複製したものも含まれ、伊豆迫山遺跡出土の鏡は日本製と考えられます。



伊豆迫山遺跡木棺墓（SK26）



湖州鏡[径約13.5cm・日本製]



副葬された土器（土師器皿・小皿）

■ 武士の時代へ

律令制度では土地は基本的に国家の所有でしたが、次第に「荘園」と呼ばれる私的な所有地が増えていきました。荘園のほとんどは、現地で土地経営していた有力農民などが、天皇家や有力な貴族・寺社に寄進したもので、税なども免除されていました。平安時代中期以降、現地で荘園を管理する「荘官」や国府の実務を掌握していた「在庁官人」、国司の任期終了後も現地にとどまり土着化した下級貴族などは、やがて武装化して「武士」となっていきます。その一部は、天皇家や有力貴族と結びつきを深め、武士団を組織していきます。その代表が「平氏」や「源氏」で、平安時代の末期には、保元・平治の乱を経て、平氏が政権の中枢を占めるようになります。

ーこの頃の国府や府中の様子がわかる史料は残っていませんが、備後国府の調査では、大規模な建物が集中する地域の周辺に、平安時代末から鎌倉時代にかけて小規模な建物が密集している状況が確認されます（ホリノ河内遺跡（元町）など）。鎌倉時代になっても、守護が執務・居住する「守護所」などがおかれ、町が拡大をつづけ都市的な機能が維持されていたと思われます。



ホリノ河内遺跡 建物跡

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D. 1	弥生
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	安土桃山
18	江戸
19	
20	明治
	大正
	昭和
21	平成
	令和

指定文化財一覧

遺跡一覧

4 中世から近世まで

鎌倉時代

元暦2年(1185)に平氏を倒した源氏が、やがて鎌倉に幕府を開きます。この幕府が置かれた地名から、以後約150年間を鎌倉時代といい、700年続く武家の政治が始まった時代になります。畿内地方の貴族や寺社などの荘園領主のもとに、各地の荘園から物資が運ばれ、人々の往来もさかになり、交通・物流が活発化しました。この時代には、軍記物や随筆、肖像画、彫刻、建築などに特徴がある文化が生まれ、また、地方の武士や庶民に布教した鎌倉新仏教も生まれました。



坊迫C遺跡 寺院跡(鎌倉～室町時代)

室町時代

元弘3年(1333)に鎌倉幕府が倒れた後に、足利氏が京都に開いた室町幕府の続いた約240年間を室町時代といいます。2つの朝廷が戦う南北朝の争いで始まり、戦国大名の争いで終わったこの時代は、朝廷・貴族・寺社の力が弱まる一方で、地域の人々は結び付きを強めて自治的な村や町を作り、社会の仕組みが大きく変わりました。

また、この時代には、貴族・武家・庶民の文化や中国の文化がまじわり、今の日本文化の基礎ができあがりました。家屋の書院造や、茶の湯、生け花、能、狂言などができたのもこの頃です。

なお、この時代の末頃には、鉄砲とキリスト教の伝来に代表されるように、日本がヨーロッパと出会うことになりました。

安土桃山時代

元亀4年(1573)に室町幕府が倒れた後に、織田信長と豊臣秀吉が政権をとっていた約30年間を、信長の安土城と秀吉の伏見桃山城の名から、安土桃山時代と呼ばれます。戦国大名を平定し、天下が統一された時代です。その頃ヨーロッパは、世界規模で貿易を始めていました。信長が、南蛮文化と呼ばれたヨーロッパの文化を受け入れたことから、日本も世界とつながることになりました。

江戸時代

慶長8年(1603)に徳川家康が江戸幕府を開き、幕府が続いた約260年間を江戸時代といいます。将軍を頂点とした幕府が全国の大名を支配し、大名はそれぞれの藩を治めていました。生産を増やすためにさまざまな努力がなされ、産業・経済が発展しました。そして、経済の発展につれて、商人など町人が力を持つようになります。200年ほど鎖国した影響で、日本独自の文化が発展し、また、長崎に来るオランダ人から西洋の科学や文化の知識がもたらされて、科学への関心が高まりました。教育の機関として、藩校や私塾が置かれ、寺小屋ではこどもたちが読み書きや計算を学びました。

一府中市では、元禄13年(1700)に上下町が江戸幕府直轄地となり、上下に代官所が置かれ、現在に残る上下の町並みの基礎がつくられました。また、享保2年(1717)には、幕府領の一部が豊前中津藩領となり、府中市は明治時代になるまで、福山藩領、広島藩領、幕府領、中津藩領に分かれていました。



行藤町の藩境石
(左:従是西北中津領 右:従是南福山領)



下川辺の藩境石
(左:従是西芸州領 右:従是西廣嶋領)

南北朝時代の動乱

建武3年(1336)正月、足利尊氏が京都で北畠顕家らに敗れ、西走して2月に鞆(福山市)へ到着します。そこで光厳上皇(北朝)から院宣を受けて、朝敵の名を返上したのを機に九州に下り、態勢を立て直した後に瀬戸内を東へ向かい、厳島神社や尾道・鞆を経てさらに東上し、5月末には湊川(神戸市)の合戦で勝利するなど激動の年となりました。武家方有利で終結するかに見えたこの動乱も、やがて足利尊氏・直義兄弟の不和で混乱(観応の擾乱)が続きます。直義の養子直冬(尊氏の実子)が中国探題の要職にあつて、当初は鞆を本拠地にしたこともあり、備後では争いが長く続き混乱していました。この時代は、日本史上での大きな変換点となりました。

有福城と青目寺

建武3年6月、津口荘の地頭山内観西は、備後守護の岩松頼宥から有福城(上下町有福)に立て籠もっている竹内兼幸を討伐するよう命令を受けました。竹内兼幸は中世備後国衙(在庁という)の役人であったとおもわれ、同年9月には、青目寺の別当(寺務統轄長)弁房らとともに、山内氏を攻撃しています。岩松頼宥は足利尊氏(武家)方の有力部将、竹内兼幸・弁房は公家方(南朝)になります。竹内氏を攻撃した武家方のなかには、長谷部氏(長氏)がいました。長氏は、翁山(上下町上下)に城を構えていた豪族です。このように、備後地方でも公家方・武家方に分かれて戦闘が繰り返されており、一族内、あるいは近隣の者同士でも争っていました。その端緒は、南朝方の桜山四郎が吉備津神社(福山市新市町)で拳兵したことですが、伝承では上下町佐倉も桜山氏ゆかりの地といわれています。

正平17年(1362)11月、安芸の豪族吉川経政が直冬を助けるために「備後国符中」に到着したという記録があります。「府中」という地名の史料上の初見です。翌12月には、符中・宮内・矢野でも戦いがありました。動乱を経て、未だ命脈を保っていた古代的な秩序の崩壊が一気に進み、府中周辺でも、「在庁」官人という古代的な権威を拠り所にしていた竹内氏、古代以来の大きな寺である青目寺、吉備津神社などが衰退することになります。青目寺の「十一面観音像」はこの時代のものと考えられ、弁房ら僧兵がこれに合掌して戦いに赴いた姿が想像されます。

中世は、戦さや飢饉などが続き、人々が死と常に隣り合わせの時代であったせいも、仏教が庶民の間にも浸透してゆきました。府中市重要文化財に指定されている座禅堂などがある上下町善昌寺は、正中2年(1325)に当地の豪族斎藤美作守景宗が弁翁という僧侶を迎えて開かれました。



甲奴郡のほぼ中央に立地した有福城



上下の町並みから望む翁山城



青目寺の十一面観音像

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D.	弥生
1	
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	鎌倉
13	南北朝
14	室町
15	戦国
16	安土桃山
17	
18	江戸
19	
20	明治
	大正
	昭和
21	平成
	令和

指定文化財一覧

遺跡一覧

八尾山城と守護山名氏

永享 9 年 (1437)8 月 1 日、山名満熙 (持熙) は、将軍足利義教に遠ざけられていた大覚寺義昭 (義教の弟) を擁して備後国府城で挙兵したものの敗れて、満熙の首級は京 (平安京) へ届けられました。異母弟である山名持豊 (後の宗全) が、備後などの守護を務める山名家の家督を継いだことに対して不満に思ったことが発端です。この出来事は公家たちの日記にしたためられていることから、京でも噂になった大事件だったことがうかがえます。

この「備後国府城」とは、かつて国府があった地の背後にそびえ立つ八尾山城 (本山町・出口町) を指していると考えられます。八尾山城の城主については、江戸時代初め頃の書物には山名伊豆守・宮田備後守、江戸時代中頃ののものには山名清氏と記されています。宮田氏は山名氏の一族で、「応仁・文明の乱」(1467~77) では、西軍の主将山名宗全に代わり八尾山城に入り、備後の西軍を指揮していました。八尾山城は守護山名氏と関わり深い城でした。

南北朝時代以降、備後守護は神辺城を拠点にしたといわれていますが、実は確実な根拠があるわけではありません。例えば、暦応元年 (1338) 3 月に浄土真宗の著名な僧侶である存覚上人が、「備後国府の守護の面前で日蓮宗の僧と宗教論争をした」という史料があり、守護が備後国府にいたことを示しています。ここでいう備後国府とは単なる地名で、他国の例でも、武家の地方支配の拠点である守護所は、多くは国衛の近くに構えられています。

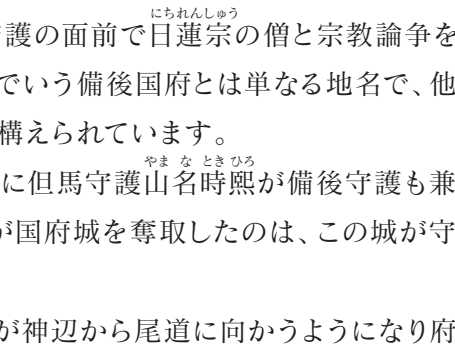
備後の守護は短期間に次々と交替していましたが、15 世紀に入った頃に但馬守護山名時熙が備後守護も兼ねたことから、備後守護は山名氏が継承するようになりました。山名満熙が国府城を奪取したのは、この城が守護の城というシンボリック的存在であったからと考えられます。

神辺に守護所が置かれたとすれば、その背景には、古代以来の山陽道が神辺から尾道に向かうようになり府中を通らなくなったことや、国府城の事件が原因で府中から移転したと考えることもできます。伝承によると、神辺城は嘉吉 3 年 (1443) に再築されたということです。

なお、元町の住宅団地造成工事に先立って行われた池ノ迫遺跡の発掘調査では、砦の跡が見つかり、深い堀切がつくられていました。これは国府城をめぐる戦いの時か、少し後の応仁・文明の乱の頃に築かれた可能性があります。この時代にも、武家が備後全体を支配するうえで、「府中」の掌握は大きな意味を持っていたと思われます。



市街地から八尾山城を望む
[左:八尾山城 中央:幡立山城 右:亀ヶ岳]



池ノ迫遺跡の堀切



池ノ迫遺跡の堀切



市街地の背後にそびえる八尾山城



八尾山城の発掘調査 [東端郭]



出土した鎧の小札と矢じり

上下の臨済宗寺院

中世には戦いや飢饉が打ち続き、人々が日常的に死と隣り合わせだったせいか、仏教が庶民の間にも普及していった時代です。

臨済宗は、室町幕府に庇護された五山系と、それを潔しとしない林下系に大別されます。幕府は中国の制度にならい、天龍寺以下の京都五山、建長寺以下の鎌倉五山、それらの上に南禅寺の計 11 か寺を「五山」としました。五山の下に「十刹」、さらに「諸山」という寺格を設定し、幕府がこれらの寺を管理・保護しました。

備後では十刹に尾道の天寧寺、諸山に善祥寺など 5 か寺がありました。この善祥寺は上下町上下の善昌寺を指していると考えられます。同寺は正中 2 年 (1325)、当時の豪族斎藤美作守景宗という人が弁翁という僧を迎え開かれたという伝承を持っています。弁翁智訥は当時の臨済宗の中で一派をなした紀伊の興国寺を本拠とする法燈派の著名な僧です。

諸山格を得るということは、その寺の大檀那である豪族にとって、将軍・幕府に接近できるという機会でもありました。史料に寛正元年 (1460) に善祥寺住持任命のことが見られるので、その頃までには諸山の寺格を得ていたようです。その後で、斎藤氏あるいは長氏が檀那として奔走したかもしれません。

五山系の寺は室町幕府の弱体化とともに衰亡し、宗旨替えをして存続した寺も多く、善昌寺も曹洞宗で中興されました。

上下町有福の保泉寺、小堀の善応寺、階見の養源寺などは臨済宗永源寺派に属しています。永源寺は現在の臨済宗 15 本山の 1 つで、滋賀県の山間にある寺です。そういう立地を見ても、宗祖寂室元光が都の権力に接近することを嫌った態度が分かります。この派は林下の禅の代表的な一派です。

寂室和尚は備後とも関わりが深い人で、中国から帰途の建武元年 (1334)、深津郡吉津 (福山市) に立ち寄り、都に戻らず長年備後から備中・美作地方を説いて回りました。現在でも備後では、世羅郡・甲奴郡から神石郡にかけて永源寺派の寺があります。

上下町の永源寺派寺院はいずれも寂室和尚の弟子知庵元周が関わったという寺伝を持っています。この人は神石郡の永聖寺を拠点にしたといい、師の寂室和尚が中国で学んで来た教えを、早速備後の高原地域で説いて歩いたのでした。

臨済宗は、坐禅により自己の内にある仏性を見つめようとするいわゆる禅宗の一派です。当時の武士たちの多くは禅宗に魅力を感じていました。戦いという極限の動の状態の連続にあって、坐禅という静の状態を求めたのでしょう。



弁翁智訥禅師木像
(座禅堂内)



中世の禅堂が残る善昌寺



臨済宗永源寺派の保泉寺

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D.	弥生
1	
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	
18	江戸
19	
20	明治
21	大正
	昭和
	平成
	令和

指定文化財一覧

遺跡一覧

中世の石造物

人々は、石を加工してさまざまなものを造ってきました。中世は、石垣の普請や礎石を使った建物が増加し、仏教の普及に伴い仏塔や墓塔が大量に造られたので、石の加工技術が大いに高まった時代でした。府中市内には、県・市文化財に指定された貴重な石造物が多く見られます。

本山町の青目寺塔婆（県指定）は、正応五年（1292）の銘がある花崗岩製の五層塔です。塔（塔婆）は、もともと寺の伽藍の中心に大きな木造建築物として建てられますが、石製の塔は供養塔として造られたことが多いようです。境内の水鉢（市指定）は花崗岩で造られた八角形の鉢で、側面に蓮華文が刻まれています。天文二四年（1555）の銘があります。

青目寺西方の山中にある「伝うしの塔」（市指定）は、その形態から鎌倉時代初期にまで遡ると考えられる五輪塔で、県内最古級といわれています。青目寺の下方に鎮座する日吉神社にも、正和四年（1315）の銘が入った宝塔（県指定）があります。元町の坊迫にも、南北朝時代頃とみられる宝塔（市指定）が残されています。宝塔は残された数が少なく、珍しいものです。これらの塔はすべて墓ですが、その主は明らかになっていません。

府川町の日吉神社鳥居（市指定）は、鎌倉末から室町時代初めに創建されたと考えられ、県内最古級といえます。宝暦十年（1760）に再建したことが刻銘されています。

鵜飼町の常福寺水鉢（市指定）には、天文十一年（1542）の銘や「尾道住大工左衛門」と刻んであり、尾道石工の作製が確認できる県内最古の例です。

上下町にも貴重な石造物が残されています。矢野の安福寺には、正平十年（1355）銘の宝篋印塔（県指定）があります。「正平」は南朝年号で、正平 17 年には矢野で合戦があったことも史料に見えることから、南朝方に属した地元の武士と何らかの関係が考えられます。宝篋印塔の隣には、宝塔（市指定）も並んでいます。小塚の少林寺近くには、正長元年（1428）の銘が刻まれた宝篋印塔があります。この塔は、通称「小米石（こごめいし）」と呼ばれる結晶質石灰岩で造られ、東城町（現庄原市）から岡山県阿哲郡（現新見市）あたりで産出する石材です。製造当初は白く輝いていますが、風化とともに表面が米粒のように剥がれてしまい、銘が判読できるものは非常に珍しいです。小堀の長福寺には、天正八年（1580）銘の無縫塔（市指定）があります。無縫塔は、僧の墓塔といわれています。

石造物も文献などとともに歴史を語る貴重な資料です。府中市の石造物を改めて見ると、比較的古いものが多いということがわかります。しかし、製造に携わった尾道石工たちの活動や、小米石製品の流通経路などはよく分かっていません。



青目寺塔婆
（本山町）



伝うしの塔
（本山町）



常福寺水鉢
（鵜飼町）



安福寺宝塔・宝篋印塔
（上下町矢野）



長福寺無縫塔
（上下町小堀）

上下代官所

上下陣屋（代官所）のあゆみ

関ヶ原の戦い後、福島氏が備後・安芸を一時的に支配しましたが、元和 5 年（1619）からは水野氏が福山藩 10 万石（備後 7 郡と備中の一部）を治めるようになりました。元禄 11 年（1698）に水野氏は 5 代目藩主に跡継ぎが不在のため断絶し、翌年領地が再検地された結果、旧福山藩領は 15 万石と算出されました（その時の検地帳は各村に控えが保管。上下地区に関係するものは市指定）。元禄 13 年（1700）に旧福山藩領は二分され、10 万石は新福山藩領（松平氏、後に阿部氏）、5 万石は幕府領となりました。上下と備中笠岡には代官が置かれ、上下代官（初代：曲淵市郎右衛門）は、安那郡・神石郡・甲奴郡の計 71 か村（約 4 万石）を管轄しました。

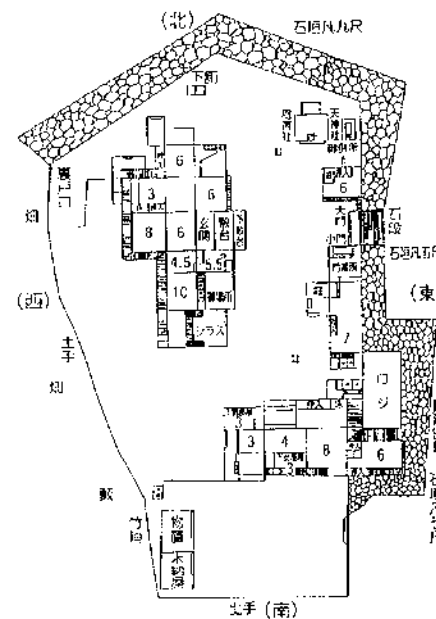
享保 2 年（1717）、備後の幕府領のうち約 2 万石が豊前中津藩領（奥平氏）に編入されました。それに伴い、上下代官は廃止され、石見銀山大森代官所（島根県大田市）の出張陣屋に改められました。出張陣屋には、大森代官（島根県大田市、石見銀山も管轄）配下の手付・手代 3～4 名が派遣されて、神石郡・甲奴郡の計 22 か村を管轄しました。その後、幕末には神石郡・甲奴郡の 13 か村と備中 12 か村を管轄しています。

こうした代官所・陣屋の機能を維持するためには、さまざまな諸経費をはじめ公用に関する人馬等の供出（助郷役）などが必要ですが、これらは支配下の村々の負担とされていました。

上下代官所跡の発掘調査

明治時代になり上下陣屋は廃止され、跡地には明治 6 年（1873）に学校（考按舎）が建てられ、その後も保育所や役場として利用されてきました。この間、昭和 16 年（1941）には「天領上下代官所跡」として、広島県史跡に指定されています。平成 16 年（2004）には府中市と合併し、上下支所として利用されていましたが、平成 19 年（2007）に支所が別の場所に移転し、解体工事されることに先立って、遺構の残存状況を確認するために発掘調査を行いました。

明治 2 年（1869）の絵図などの検討から、敷地の北側では、現在の石垣の内側に代官所の時期の石垣と石段が存在していると想定していました。調査の結果、江戸時代の代官所の石垣と石段と明治時代の学校の石段と思われる痕跡を確認しました。石の積み方から見て、検出された石垣は幕末頃に築かれ、その後石段が築かれていると考えられます。さらに、学校として利用されている頃に、古い石垣の石を再利用しながら、石段の下端の位置に合わせて新しい石垣を築くと同時に敷地を拡張しています。この工事は、明治 21 年（1888）に寄付金 800 円をかけて大改築したものの可能性があります。また、現在の石垣は、昭和の初め頃築造されたものと思われます。



上下陣屋の図
（明治 2 年（1868） 数字は量数）



代官所跡に建つ上下尋常高等小学校
（明治末）



発掘調査で確認した石垣
（幕末頃か）

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D.	弥生
1	
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	安土・桃山
18	江戸
19	
20	明治
21	大正
	昭和
	平成
	令和

指定文化財一覧

遺跡一覧

5 近代のあゆみ

慶応 3 年 (1867) の大政奉還により、260 年続いた江戸幕府は終焉を迎え、日本は明治天皇を中心とした近代国家として生まれかわり、社会の仕組みが大きく変わりました。政府は国力を付けるために富国強兵・殖産興業を掲げ、積極的に進めます。近代的な工場の設置、鉄道の開通、郵便制度の開始などのインフラが整えられ、洋服・洋食・散髪などの日本人の生活や習慣も西洋化が進み、「文明開化」が起きました。やがて憲法が制定され国会も開かれました。

国力を強化するなかで、朝鮮の支配を巡って日本と清国、ロシアに対立が生じ、日清戦争 (明治 27 ～ 28 年 (1894 ～ 95)) ・日露戦争 (明治 37 ～ 38 年 (1904 ～ 05)) が起こります。その結果、日本は台湾や朝鮮を植民地とし、国際社会での存在感を強めていきました。当時、世界ではヨーロッパの一部の国を中心に各地を植民地化していました。この国々の対立から起こったのが第一次世界大戦 (大正 3 ～ 7 年 (1914 ～ 18)) です。

大正時代 (1912 ～ 1926) を中心に、人々の間に民主主義的な政治への要求が高まり、労働者や農民の組合が結成され、部落解放運動、女性解放運動が起きました。こうした社会の変化を大正デモクラシーと呼びます。この時代は女性の社会進出が増え、学問の発展、教育水準の向上による雑誌や本の普及、ラジオ放送、映画上映がはじまり、生活の洋風化が広がっていきました。

昭和 4 年 (1929) にはじまった世界的な経済不況のなかで、日本は中国を侵略して経済不況から脱しようしました。経済不況はイタリア・ドイツ・日本でファシズムを生み出し、やがて第二次世界大戦 (昭和 14 ～ 20 年 (1939 ～ 45)) が引き起こされます。日本は昭和 6 年 (1931) に満州事変を起こし、以降 15 年にわたって中国と戦争することになります (日中戦争)。長期化する戦争で資源不足を解消するために、東南アジアにも戦線を広げ、アメリカ・イギリスなど連合国との戦争に突入します (太平洋戦争)。当初は勝利しましたが、アメリカとの圧倒的な国力差の前に日本は各地で負け続け、日本本土への空襲も激しくなりました。そして、昭和 20 年 (1945) 8 月、広島と長崎へ原子爆弾が投下され、日本は無条件降伏をしました。

敗戦後、日本は連合国の占領下に置かれ、GHQ の指導のもと民主化が進められました。現在では当たり前の、言論や政党の自由、教育や選挙権の男女平等といった制度が確立され、日本国憲法が昭和 22 年 (1947) に施行されました。その後、昭和 27 年 (1952) にサンフランシスコ平和条約が発効し、日本は主権を回復します。人々の生活は戦時中から続く物資不足で苦しい状態でしたが、昭和 25 年 (1950) に朝鮮戦争による朝鮮特需により経済発展をとげ、ほぼ戦前の水準まで回復しました。その後、高度経済成長やバブル経済など、右肩上がりの発展を続けましたが、大気汚染や公害、自然環境の破壊など多くの問題が生じました。

平成 3 年 (1991) にバブル経済が崩壊すると景気は停滞します。バブル崩壊から現在までの約 30 年間、さまざまな経済政策が打ち出されてきましたが、経済は低迷・停滞を続けています。現在の日本は、激甚化する自然災害、少子高齢化、人手不足、貧困格差、介護・医療制度など数多くの問題を抱えています。令和 2 年 (2020) からは新型コロナウイルスが世界的に蔓延し、物資不足、人手不足に拍車がかかっています。

一現在のわたしたちの生活は、世界各地の動きと密接に関係しており、世界の解決すべき課題は日本がもつ課題や出来事とどこかでつながっています。こうした現代社会にあって、わたしたち一人一人が歴史を学びながら生きることで、これからの歴史を作る主人公であることを自覚し、様々な出来事を自分の事と捉えて関わっていくことが大切です。



江戸時代になると、東海道をはじめとするいわゆる五街道を幹線にして、それに接続する脇街道、脇往還が枝葉のように広がる交通網と、それに伴う宿駅制度が整備されました。大坂 (大阪) から下関までは、山陽道あるいは中国道、西国街道と呼ばれ、五街道に次いで重要視されていました。山陽道が備中から備後に入ってまもなく、下御領村 (神辺町下御領) から分かれた脇街道がいわゆる石州街道、銀山街道です。

ちなみに尾道港から山陰に抜ける出雲街道 (雲石街道) も、石州街道と呼ばれることがありました。当時の街道には、石州街道や伊勢街道のように目的地の名称で呼ぶものも多く、同じ目的地に向かう複数の経路が同じ名称で呼ばれることもあったのです。

石州街道は、幕府直轄領の大森銀山・代官所 (島根県大田市) に至る道として重視され、道幅が 7 尺 (2.1m)、府中市村 (府中市府中町)、上下村 (同上下町)、吉舎村 (三次市吉舎町) に宿駅が置かれ、伝馬人足が常置されていました。吉舎宿では出雲街道と合流し、赤名峠を経た後に西にわかれて銀山街道となり、大森銀山、温泉津港へと至りました。このルートは、大森代官所の役人などが、幕府領の年貢銀の大坂への運搬、赴任や離任、大森銀山の運上銀を大坂に運んだ帰路などのさまざまな公用に利用しました。また、石州から江戸へ送る御用蜜 (大蜜) の輸送にも利用されたようです。

さて、毎年秋になると、雑税として納める幕府運上銀 (石州銀、御用銀ともよばれる) と銅が大森銀山から、銀山街道、出雲街道を経て、陸路で尾道港へ運ばれた後、海路で播磨 (現兵庫県) の室津港を経由して大坂へ送られていました。それに対して、吉舎から分かれて石州街道を経由して、笠岡港に至るルートも利用されたといわれています。しかし、残念ながら、運上銀が府中市村や上下村を通ったことを示す確実な資料は残っておらず、詳細はわかりません。ただし、大森銀山の産出銀を元手に上下の有力商人に委託して金融貸付業を営ませて、その利潤銀によって減少した銀産出量を補う貸付融通の制、いわゆる「上下銀」から考えて、銀山の産出銀の一部が上下と大森の間を行き来したかもしれません。

街道は、単に人々の往来だけでなく、物資の流通にも大きく関わってきました。江戸時代に商品経済が発達する中で、府中周辺の特産品である木綿、藍、煙草など、また山陰や中国山地の産物が、石州街道を使って全国に運ばれていきました。宿駅のあった府中市や上下は、集散地としてにぎわいました。

石州街道のうち、下御領から府中市にかけては、中世や古代の山陽道とかなりの部分が重複し、また府中市から上下に向かうルートは、古代において国府と備後北部を結ぶ最も重要なルートだったと考えられます。石州街道は、古代から備後南部と北部の接点の役割を果たしてきた府中～上下が、近世にいたるまで交通の結節点としての機能を失わずにいたことをうかがわせます。

上下銀と上下の町並み

江戸時代、上下の商人層は金融業を広く営んでいました。これは、代官所・陣屋が、大森銀山の産出銀を元手に、上下の有力商人に委託して金融貸付業を営ませていたからです。「上下銀」とよばれ、幕府領内にとどまらず、広島藩領・福山藩領など周辺地域にも広く及び、明治時代以降も続きました。

上下は代官所が置かれることにより周辺の政治的な中心地として、また宿場町として、金融を中心とした商業の町として発展し、現在の町並みの原型を形づくったと考えられます。



石州街道 (出口町)



道標 (左: 上下町上下 右: 府中町)

世紀	時代
B.C.	旧石器
	縄文
A.D.	弥生
1	
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	江戸
18	
19	明治
20	大正
21	昭和
	平成
	令和